

---

# クローバー

神代唯奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローバー

### 【Nコード】

N4064Z

### 【作者名】

神代唯奈

### 【あらすじ】

駅の広場にある、謎のポスト。郵便局が回収するわけでもなく、かと言って使われていないわけでもない。誰もが知っているけれど、誰もが秘密にしているポストの使い方。「駅のポストに手紙を入れる。人探しから殺しまで、何でも承る」何でも屋クローバーはいつも貴方を待っている。

## プロローグ

アヤという女は、一応俺の相棒であり、且つ同居人という立場の間である。女というのはこの世界では軽視されがちだが、冷血にして鮮血な彼女はそれなりに腕がたち、特定の武器を使用しないというスタイルで数々の人間を屠ってきた。普段は長袖と革手袋で隠された右腕は、内部にロングソードを仕込んだ特別製の義手だったり、靴の踵には爆薬が詰まっている。身体全てが凶器となり得る女というのも今日日そんなにいないだろう。

また、見てくれも良い。何も知らない少年達を悪鬼羅刹魔界道に連れ込んで誑かせる程度には、その容姿もある。弁明しておく、俺もそこそルックスに自信がある。が、残念ながら彼女ほどではない。化粧に気を配らずに艶めいた肌を保っているのは、元のパーツが高い完成度を誇っているからだ。スタイルもよく、バストはたゆやかに実り、ウエストは引き締まり、ヒップも肉付きがある。世の中の八割方は美女と答えると断言できる。

こつ言ってしまうえば、まるでアヤという女は完璧に完成された女で、俺は彼女にべた惚れしているように聞こえるに違いない。と、いうか、これだけなら俺も満更でもないのだ。しかし、神は常に人類に残酷で無慈悲な仕打ちを与える。美しく描かれた絵画にも塗料のミスがあるように、彼女にもまたミスがある。それも、決定的な欠点が、残念ながら彼女に存在するのだ。

アヤという女は、よく言えば魔性の女、悪く言えば、いや、世間一般的に言えば口と性格が悪い。人間として必要最低限備わっているであろう、その思いやりという心が致命的に欠けているのだ。まるでロボットミイ手術を受けたかのような欠落感情で、ことごとく人をけなす。気の知れた友人などならばともかくとして、初対面の間でさえ彼女は詰った。たまたま道を聞いた老人でさえも、彼女にしてみれば道端に落ちているカラスの屍体と同類なのだ。迷惑極ま

りない話である。

加えて、彼女の修正不可能な脳味噌の話はこれで終了しない。もうこの話だけで溜め息を落とすのだが、絶望は始まったどころか、未だ幸せの絶頂期で留まっている。劇で例えるなら、始まる前にどんな内容なのかあれこれ想像する時間だ。それぐらい、彼女の性格は歪んでしまっている。

己に関わる人間は全て抹殺せんという、戦闘民族のような思考を持つ女ではあるが、困ったことに、本当に頭の螺子どころか、良心と名のついた大切なものを胎児の頃に落つことしたとしか思えないことに、アヤという杜撰な女は人と関わるのが好きなのである。主に殺し合いな意味で。

平和主義日本は、当たり前だが殺人を法で禁じている。他の国も大体そうだ。倫理や論理を言うわけではないが、俺だって人殺しはよくないと言う。職業柄仕方ないにしても、むやみやたらに殺人をしてはいけないのだ。こんなこと、園児でも知っている、人としての常識だ。

ただ、そうは問屋が卸さないと言うのがアヤであり、やはり狂人の性なのか、むやみやたらに人を殺したがる。流石に一般人を殺すのではないにしても、強い敵を見つけては殺しまくる。殺すではあきならず、言ってしまうえば殺戮。凄惨で悲惨。お前はどこの漫画のキアラだ、最近の少年漫画でさえ殺しは自重しているぞと言わなければならぬ程度には、残虐な女。暴力の塊みたいなやつである。

どうにかして追い払いたいのは山々なのだが、様々な事情と諸々の付加要素が上手い具合に重なって、結局の所俺の家に厄介になっている。相棒と同居なら仕事をしやすいと言えば聞こえは言いが、駆逐艦の如く火種をばらまく女とは縁を切断したいのが本音だった。見てくれと腕がたつという、微々たるメリットが俺を支えているだけで、正直しんどいです。神は与えるべき才能を間違え過ぎたのではないかと本気で思う。

それがアヤという女。

けれども、俺はこの女自体が嫌いなだけであって、スイトツクな  
生き方は嫌いじゃない。むしろ好感を持てる。

俺も彼女と同様、そういう人間だからだ。

つまりはそういうこと。

今日も変わらず夜がくる。

## 第一話 殺し屋

「やっぱり、このゲームをする時間は何を差し置いても死守すべき事柄なんだよ。人間がより発達し、三大欲求に勝る高度で高尚な欲求を持ったんだから、それに従わないのは嘘だろ」

ぶつくさと文句をぶつけてくるアヤに向かって、とりあえず俺の意見は出した。どんなに愚かであろうとも、それが微小であっても、一応は自分の意見は通す。

塵も積もれば山となる。

……そうであつて欲しいだけだが。

「うるさい、殺すわよ。あなたのミドコンドリアにも満たない矮小な口答えを聞きたいわけじゃないの。どきなさい」

塵が降つてきた先から、片っ端に掃いていく女は、俺の正当で尊重すべき意見を叩き潰した。普通なら、こんな悪辣な言葉を吐く人間を生かしておく道理などないわけだが、この女にそんな道理はこれっぽっちもない。反論すればするほど、こちらの尊厳は著しく減少するのである。

「分かった分かった。もう少しで終わるから待つてくれよ。趣味ぐらい、時間を割いてもいいだろ？」

「ふんっ」

「ああ!？」

心底どうでもいいという顔で、本体の主電源を引き抜いた。

お母さんが怒りに身を任せて、八つ当たりをするような抜き方ではなく。ドライヤーを使いたいから、使っていないコンセントを抜くかみたいなどでもよさで、あっさり抜いた。

俺のエリザベートは斎祀を倒す事なく、目の前の鬼畜にあっさりやられた。

「お前……」

「ドラマがもうすぐ始まるのよ。私がテレビを観ている間にご飯

を作ったら？」

「お前……」

再度呟く。開き直ったとかなら諦めがつくが、この女は自分が全く悪いとは感じてないようだ。無知は罪を地でいく奴も珍しい。

「はあ……。分かったよ。晩飯は何がいい？」

重い腰をソファから上げて、俺はゲーム機を片付ける。アーケードでかなりの額が飲み込まれた格ゲーだが、やはり自宅でする方が落ち着く。

ゲーセン特有の空気が嫌いなのかもしれない。ゲームは好きだけど、ゲームをする人間は別に好きじゃないし。ゲーセンでやる格ゲーもオツだけどさ。対戦するのはゲーセンでしか味わえない感覚だ。意地になって連コンしまくるんだよな。

「何でもいいわよ、そんなの。察しなさいよ」

「俺はオカンか。適当に有り合わせで作ってもいいんだな？」

「……」

返事がないところを見ると、OKらしい。テレビに齧りつく背中  
は、さっさとキッチンに向かわないと殺すぞ、こっちは集中したい  
んだよといった、鬼気迫る雰囲気醸し出していた。

「やれやれ」

触らぬ神に祟りなし、である。黙って従っておけば、最小限に被害を抑えることは出来る。

実に情けない。

けれど、俺にも色々あるのだ。

自尊心の虚栄とか。男だもの、プライドぐらいあるよ。

果てしなく、地平線の彼方から見える鉄塔のような、小さくて気  
高いプライドなんだけどな。

「そっいえば」

「なんだよ」

アヤは唐突に、ぼつりと声を漏らした。

「……何でもない」

「言えよ。気になるだろ」

「言つても言いけれど、あなたのマイクロ粒子程度の脳味噌が、私的知的な言語を理解出来るとは思えないし。無駄なことはしない主義なのよ」

「誰がマイクロ粒子だ！」

遠回しに馬鹿にされていると言うか、人間扱いさえされていないか。大体、微生物にもマイクロ以上は脳味噌はある。生憎俺は聖人君子でもなんでもなく、今まで我慢した自分を盛大に褒めたえたいぐらいだから、この際言っちまおう。

割と腹がたつ。

「お前が口が悪いのは知ってるけど、今の台詞はなんだ。まるで俺が微生物に劣ると言いたいようだな」

「あんたと微生物を比べるなんておこがましいわ。謝りなさいよ、全微生物に」

「お前が俺に謝れよ！」

「嫌よ面倒臭い。むしろあんたが謝るべきよ。偉大なる私に話かけるというだけで、罪人なのよ」

「ただこれだけは自分を持ち上げるんだ。お前は神か。」

まあ、見えなくもないけどな。元々、神話の神なんてこんな感じで人間を困らせることが大半を占めるんだから。

ギリシャとか、結構酷いのが多い気がする。お国柄や思想の違い上、仕方ないと思うが。

「とはいえ、こんな女神はお断りだった。」

「もういい。どうせ下らないことだろ」

「下らないとは何よ。あなたの趣味のほうが下らないわ。バーチャルと戯れて何が楽しいのかしら」

「ゲームを馬鹿にするな！俺は馬鹿にしても許すが、ゲームは馬鹿にするな！」

ゲームはなあ、一つ一つに多くの人件費やら技術やらが詰まってるんだぞ！最近落ち目だけど！



「オタクはこれだからキモいのよ」

「言ってる。先入観が人を腐らせるって言った哲学者を知らねえのか」

通り魔や監禁事件などのせいで風当たりが厳しい業界ではあるが、作品とは全く関係ない。現実とバーチャルを間違える人間は、そもそもとして人間失格である。

俺が言っても意味がないのは内緒だ。

「……お前と口論しても無駄なだけだな。飯、作るわ」

そう言っただけでキッチンへ向かう俺に、大して面白くもなさそうにアヤは言った。

「手紙、きてたわよ」

手紙がきている。

その意味は、俺達だけが分かる意味合いだ。

SOS信号。人探しであれ、抹殺であれ、ともかくとして、依頼の手紙。

駅前にある秘密のポストは俺が設置したものだが、まさかこんなにくるとは思っていなかった。当初の目標は、金持ちが月に一回くればいいな、というものだったが、噂というのは早いもので一週間に数回は出張るようになった。この不況の世の中でこんなに仕事があるのもどうかと思うけれど。

「そういうことは早く言えよ。お前が回収に向かったなんて知らなかったから、朝方行っちゃったぞ」

回収している姿を見られるのは沽券に関わる為、比較的早い時間帯、明朝に行くのだが、今日は一枚も入っておらず落胆しながら帰ったのだ。それより早く回収したのならば、恐らく深夜に回収したのだろう。

「つか、誰にも見られてないだろうな……？」

「誰にも見られてないわよ、失礼ね。ただの暇つぶしに行っただけよ」

俺の表情から読み取ったのか、露骨に嫌悪感を滲み出した顔でアヤは話す。あれこれ詮索されるのが面倒なのだろう。その点に関しては俺も興味がないから別にいい。こいつが夜何をしているかなんて知りたくもない。いたいけな少年が道に迷わなければ、俺は何だっつていいのだ。

「で？今回の仕事は？」

「まだ読んでないわ。ほら、さっさと読んで」

言って、懐から手紙を取り出し俺に投げる。依然としてこちらを向かずに投げるさまは、客観的に見れば案外凄いのかもしれない。気配を辿る女。

……ちよつとカツコイイな。

「えーと、なにになに……」

第一印象としては、中々上流階級の人間からのお手紙らしかった。西洋風な手紙の封筒は、見当違いでなければフランス製の高級レターである。筆記体で記されたサインから育ちの良さも伝わった。

「ふむふむ……。ナルホド」

「で？今回の仕事は？」

「最高だ。払いよし、内容よし、安易よし。義手の手入れをしない明日の昼に依頼者と打ち合わせだ」

「へえ。それはそれは」

唇を釣り上げて、喜々として笑う。決して狂人というわけではないが、やはり彼女は根っからの殺人鬼だと断言しよう。

「俺も準備をしないとな」

さあ、仕事だ。

## 第二話 依頼者

CZE CZ75という銃は1975年にチエコスロバキアが開発した自動拳銃だ。拳銃の割にはあまり軽量ではなく、冷戦時に開発された銃なのでメジャーとは言い難い。だが、絞り込まれた銃身はスマートになっており、そのフォルムが美しく、また、命中精度も格段に高い。とある漫画では、東欧が誇る最高の最高傑作とも称され、度々映画や漫画作品に登場する。S・A・S・英国特殊部隊が有名どころか。俺の中ではFN Five-seven、G17Cと並んで、最も頼れる銃の一つとして懐に入れている。

「つまり、俺が得意とするのは銃殺つてわけだ。目撃者さえいなければ、これに勝る殺し方もそうはないぜ」

ビジネススマナーの一環として、俺は依頼者に自分の獲物を見せた。アヤは仏頂面を崩さず、ただやり取りを見ているだけである。こいつのことだから自分の凶器を見せるのは、相手を殺す時だけだとか何とか決めてそうだ。いや、決めている。絶対。

「俺達が本物だとは分かっただろうけれど、どうだ？まだ俺達に頼もうと思うのか？」

「ええ。こんな汚れ仕事は、私達の範疇を越えていますから」  
「質問の答えにはなっていないが……。まあ、いいや。仕事が貰えるなら、こっちは文句も無いしきっちりこなす。プロなんでね」

「お願いします」

上流階級の躰が行き届いているのか、上品に頭を下げる依頼人。金持ちは何から何まで俗人とは違うんだろう。仕事をしていればこういう人間に会うことも珍しくはないが、今回はやや事情が違った。驚いたことに、依頼人は青い春を駆け抜ける高校生だったのだ。金さえあれば文句はないのだが、あまりいい気分ではない。子供が裏の世界というか、汚い世界に入ってくるのは個人的に嫌気が差している。

手紙によると、目の前の彼女は今急速に成長を遂げる大企業の人娘らしい。倒れた父親に変わって、やや早い初陣ではあるが、会社の社長代理とかなんとかを務めているとか。よくある話ではあった。手紙に記された連絡先に連絡をし、このバーを待ち合わせとして指定したのだが、未成年を連れ込んだ事件としてしよっぴかれるかもしれない。

「さて、ちゃっちゃと済ませようか。学生が大人のバーになるとなっっちゃ、色々マズいからな」

「私は別に構いません。それでも一企業の娘ですから」

「……そうか」

その決意に何があつたのか、訳は聞かない。アングラな連中に頼ってくる人間なんざ、大体は予想がつく。昼間っからバーに入る俺が言うのもなんだが。

周囲を確認。店にはマスターと俺達のみ。盗聴関係はシロ。警察のバックもオールグリーン。

このバーに限って危険なことはないとは思うが、念の為だ。同業者が嗅ぎ付けている可能性も否定できない。この世界、石橋を叩き過ぎることはないからな。バーのマスターも細心の注意を払っているのは知っているんだが。そうでなければ、日夜闇が蠢くバーは存在出来ない。

「確認だ。手紙でも書いてあつたが、お前の会社から金を盗んで逃亡した男を社会的に抹殺して欲しいわけだな。なるべく警察沙汰にせず、速やかに殺すこと」

「そうです。お恥ずかしい話、私の所に警察が介入してくると厄介ですので」

凜とした視線でこちらを見据え、長い栗色の髪をたなびかせながら依頼者は言った。とても殺人を命ずる者とは思えない、真っ直ぐな視線だった。

「即金で120万。現金でだ」

「結構高いんですね」

「70万が俺達の取り分。50万が警察組織幹部への賄賂金」

「賄賂金？そんなものが通じるのですか？」

「案外な。勿論、俺の信用とかもある。罪も無い人間を殺してもまずいが……。法の下に裁けない人間や、とんでもないクズつてのもこの世の中いるんだわ。日本で殺人事件が起きて、それが解決されないのはそういう理由があるわけさ」

意外かもしれないが、警察組織とはそういうものだ。無差別殺人や凶悪犯罪には躍起になるが、世の中の不要物にはとことん厳しいホームレスが被害に会う殺人事件が多いという事実が一般に知られていないのは、警察が動かないからに他ならない。脚光を浴びるような事件ではない限り動かないのは、何も警察に限った話ではないが。

「正義感のある人間もいるけど、大抵そういう奴は下っ端。悪い奴が上に伸し上がるのは、いつになっても変わらないからねえ」

「……………」  
あまり深く話さないほうがいいかもな。出来上がった人間かと勘ぐってみたが、全然そんなことはない。実に健全な思考だ。

それはアヤも感じとったのか、威圧的な物言いをした。

「今更遅いけれど、貴方はここに来るべき人間ではないようね」

「……………何がです？」

「気付いていないようならはつきり言っただけあげるわ。まず一つ。どんな噂を聞き付けて足を運んだのか知らないけど、基本的に依頼人は初めての依頼の場合、本人が足を運んではならない。代理人を立てるなりなんなりしなければならぬのよ。私達がもし悪どく、ズル賢い人間で、貴方を利用するだけ利用する人間だった場合どうするのかしら？」

「それは、そうですが……………」

俺が言わまいと思っていたことをこの女、ずけずけと言いやがって……。本当に思いやりがない女だ。

確かに俺も忠告はしようとした。仮にも殺し屋である俺達に顔を

晒すのは自殺行為であり、たかる力モとしては絶好の獲物だ。金だけ奪い取ってぶち殺すのは、依頼をこなすよりも簡単なのだから。現に、そういった行為をする輩は多い。

が、それらは所詮三流以下のゴミ共。基本的に一般人の耳にも入ってくるようなプロはそんなことはしない。彼らは俺も含め、自らの身分を弁えている。沽券や信頼を重んじるということが、どれだけ自分のメリットになるかを理解しているのだ。だから俺は敢えて口にしなかった。いたずらに不安にさせることはないだろう。

「それに、貴方は殺してもものをちゃんと理解してる？生きるか死ぬかって言うけど、一人を殺めるのは相当な損失なのよ。平均して、人間を限界まで酷使して得られる賃金は2億前後と言われるほどにね」

「それは一見分かりやすい例えだが、全然いい例えじゃないからな。個人差つてもんがあるだろ。ジヨブズを見てみる」

「うるさいわね。人の話にごちゃごちゃと入ってきて、死にたいのかしら。何回死にたいのか言いなさいよ」

「なんつー理不尽……」

もう少し空気を読むべきだったかなあ……。大体なんで俺にキレるんだよ。お前の沸点が分からんわ。

「十分理解してます。会社の為ですもの、仕方ありません」

今度のは若干迷いがあった。本人は一度目と同じ目をしているつもりなんだろうが、俺はその揺らいだ目を見逃さない。理性と感情がせめぎあうのが見えていて痛々しい。まだガキだというのに、彼女はあくまで修羅の道突き進むようだ。

「……また追って連絡する。多分、明日か明後日には終わるだろう」

「……では」

唇を固く結んでいる彼女は、苦々しく席を立った。あまり表情を伺うのは好きではないが、場合が場合だ。こんな時ぐらい声をかけてやらねば。

「なあ。女の子だからあんまり見ないかもしれないけどさ、仮面

ライダーとか戦隊物って、見たことあるか？」

「……はあ」

突然の俺の質問に要領を得ない様子だ。無理もない。だが、構わず俺は続ける。

「悪を挫いて正義を貫く。カッコイイよな。でも、俺はそんなじゃない。仁侠映画みたいに銃を振り回して戦ったりなんかしない。ハッピーエンドのご都合主義も存在しない。淡々と、冷静に人を殺すのが殺し屋だ。感情なんか持ち合わせちゃいない。だから、お前が感情を持ち合わせている内に言っとくぞ」

「お前は、はした金で人を殺したんだ」

### 第三話 仕事

頭上には華やかな堤灯が並んでいる。繁華街のネオンは目に大変悪影響を及ぼし、端的に言えば瞳がチカチカするのだが、この光は嫌いじゃない。どちらかと言えば、好きなほうだ。

夜の街は眠らない。人々の思惑が渦巻いたり、大きな組織が蠢いたりする為だ。例えば人が眠ろうとも、人の意志が眠らなければ、街は明かりを灯しているだろう。

「聞き込み、ね。あんたの顔の広さを活かせば訳ないのかしら」

「そんなことはないさ。今回のホシは多額の盗みを働いたとはいえ、純粹で真つ当な人間だからな。探すのは骨が折れるよ」

「そうは言っても、タレコミ屋にヤクザに、知っている人間は多数いるでしょうし。情報料も今回は少ないのだから、結果として楽な仕事でしょ」

「ああ。にしても、やけに絡むな。珍しい」

レクサスを走らせながら、俺は後部座席に座るアヤに聞いた。無論、無視されるというのも考慮に入れて、である。

この女にしてみれば、他人などどうでもいいはずなのだが、どうしたことだろう。強く質問をすることを許さない雰囲気があるので、あまり詳しくは話さないと分かっていたが、それでも気になりはする。

「私に対する挑戦として受け取れる質問を、よくもまあ真顔で言えるわね。自分という存在を省みたりはしないのかしら」

「とことん俺という存在を貶めたがるよな、お前は。もう慣れたけど」

ちよつと嘘だけど、面倒だから訂正する気はない。ミラー越しに見るアヤを横目で見るが、その顔は平坦そのものだった。

あれ？特に何も思わなかったか？

「慣れた、ということとは私がこれからあんたに暴言を余すことな



く吐き尽くす、というのも構わないのね。やがては自傷に走り、自ら命を断つても、私は何ら責任を取らないわよ」

「ごめんなさい嘘です」

少しでも油断すると、自分どころか親の骨までしゃぶり尽くす女だった。おちおち会話も出来ない。この女に一寸の期待をするのは、前提として間違いである。こっちの心労は溜まる一方だ。

「冗談はともかくとして」

「冗談だったのか……」

一瞬だけ、この女が慈愛に満ちたマリアに見えるような、そんな謎の安心感が俺を満たす。

……慈愛に満ちたつて。とことん奴隷根性だなあ。

「冗談よ。本当に攻め立てるのなら、自己申告なんてしないもの。本人も気付かぬ内にどん底へ叩き落とすものよ」

「冗談のほうのマシじゃねえか！」

運転が疎かになるぐらい、俺はえらい本気で怒鳴る。冗談のほうのマシつて、それこそどんな冗談だよ。

「冗談は冗談として、私にも思うところはあるわ。情けない大人や、大人振ることを強要された子供には、ね」

「……ああ。お前は思うところはあるよな」

今更だが、彼女にとっては身近な問題なのだった。

その昔、信頼していた大人に裏切られ。

大人にならざるを得ない状況に追い込まれた彼女にとっては。

そんなもの、今となつては仕方がないことだが、彼女から見れば昔の自分が写つたのかもしれない。これは俺の勝手な推測だが。

「だからどうこうする気はないけど。結局、選んだのは、選ばざるを得ないにせよ、本人なのだから」

「お前がそう思うなら、きっとそうなんだろうよ。俺はただ言われた仕事を忠実にこなすだけの人間だからな」

「言う割には忠告していた気もするわね」

「忠告じゃない。あれは申告だよ。どうしようもないことに気付

いてないってのも、残酷な話だからな」

どちらが残酷かしら、と言ってアヤは窓のほうを向いた。会話が途切れた車内に響くのは、排気音とタイヤを切る音のみ。ネオン街を走らせる車にしては、少々味気無い。言葉には出来ないが、こういう雰囲気はあまり好きではない。シケた空気というか、しんみりしている気がしてならない。

「音楽でも、流すか」

HDDには最近入れた曲がズラリと並んでいる。その中でも特に気に入った曲を一つ選び、寂しい空気を吹き飛ばすかのように音楽をかき鳴らす。

『 ブツ飛ばせ 始めるぜアンタら 冷めたツラ晒してんナ! 』

「……ねえ」

「なんだよ」

不意に、本当に不意打ちにアヤが俺を呼ぶ。こんな空気だから、少しばかり萎縮してしまった。

「うるさい」

「……はい」

俺は黙って音楽を消した。

「ええと、そうそう。この男だろ？見たよ。最近あのポロアパートに越して来たんだ。別に知ってるのは俺だけじゃない。あそこのアパートの人間なら誰だって知ってる」

「ふうん。ありがとな、ちよつと仕事でこいつに用があるんだ」

「あんまり無茶はしないほうがいいと思うけどね。ああ、タレコ三料は要らないよ。二束三文の情報を商品にするほど、俺は落ちぶれちゃいない」

「そうか。何にせよ、助かった。この埋め合わせはまたいつか」

「おお」

一発でビンゴを引き当てたのには面食らったが、あまり驚くことではない。よくよく考えてみれば、逃亡者というのはタレコミ屋を

利用しなければ逃げることは叶わないだろう。それを踏まえた上でおやつさんの所に足を運んだのだが、正解だったようだ。

おやつさんのマンションから颯爽と身を翻し、車へと戻る。早く仕事を終わらせたいというのもあるが、アヤを車の中に残している為だ。この辺りは路上荒らしが洒落にならない域に達しており、少し空けたただけですぐに車は人様の物へと変わる。それを防ぐ為の対策なのだが、アヤにそれが務まるかと言われれば正直微妙だった。むしろ、アヤ自身がそのまま帰宅してしまう可能性のほうが高い。

まあ、そんな考えも杞憂に終わり、無事車はあつたわけだが。

「留守番している内に何かあつたか？」

「何も……あ、いえ、何も無いわ」

「なんだその間は。何かあつたのかよ」

「私には何も無いわ」

「私には！？車はどうなんだよ！」

「私には何もなかったのだからいいじゃない。ほら、さっさと出なさいよ遅いわね。あつちの方は早い癖に一つ一つの動作が遅いのだから、残念極まりないわ」

「憶測でものを言うな。普通の速さだわ」

「私が言ったのは射撃のほうだけど？惨めな童貞は何を考えたのかしら？」

「お前、下ネタのほう拭えてないぞ」

射撃って、拳銃のほうだからな、一応。

思春期の中学生みたいなのリだった。

「では、行きますか。場所も分かったことだしな。今回は多分お前の見せ場ないぜ」

「何ですって。じゃあ何の為に私は着いて来たのよ。謝罪を要求するわ」

「勝手に着いて来た癖に……」

「あ？」

「……ごめんなさい」

後部座席に座る女の顔は、ちらりとミラーで見る限り般若の形相をしていた。ちらりと見ただけでそれなのだから、正面から見てもうと色々ヤバイ。血を見るだけでは済まないかもな……。

「あーあ、今回は殺れると思ったのになー。誰のせいかなー」

「子供みたいなこと言ってるじゃねえよ……」

駄々をこねる女は放って置いて、俺は車を発進させた。あまり気は乗らないが、仕方あるまい。これも仕事だ。

「ごめんください」

インターホンのないアパートでは、戸を叩くしか呼ぶ方法はない。呼び鈴も申し訳程度には設置されているのだが、気休めにしかならないだろう。夜も深い時間帯では、単純なやり方でないと起きはしない。

少し間が空いて、くたびれた顔の中年が顔を出した。気の弱そうな男で、とても法を犯すようには思えない。

「どなたでしょうか……」

その声も弱々しく、気の毒そうな印象を受ける。突然の来訪に戸惑っているのか、警戒心が強かった。そりゃ当たり前だが。

「ええと、詳しくは話せませんが、貴方が元々所属していた会社に頼まれてましてね。いや、今すぐどうこうするわけではないのですが、少しお時間を頂けないでしょうか」

努めて平静、そして丁寧な口調を心掛けたつもりだが、それが相手に伝わったかは一目瞭然だ。

顔をわなわなと震わせて押し黙る男は、諦めとも取れる顔をしていた。

「娘が……。娘がいるんです。重い病に倒れて、それでどうしてもお金が必要なんです。明日に手術でして、ですからどうか……」

「大変でしたね」

要するに、手術する為には金が必要で、どうしようもなくなった為に会社の金に着手してしまったのだろう。自分の子供の為には、

そのぐらいのことをしなければならなかったに違いない。この男は、そこまで追い詰められていたのだ。アヤなら失笑する事情だが、あいつは車で留守番。この吐露を聞くものは俺以外いなかった。俺も人の子だから事情は察してやれる。

だが。

「それで盗んでいってという理由には、ならないよな」

「え？」

懐から取り出したのはCZE CZ75。1975年にチェコスロバキアが開発した自動拳銃。俺が最も信頼する銃の一つ。

人を容易に殺すことが出来る兵器の一つ。

「事情は察するし、同情もしてやれる。が、それで仕事を止めるわけにはいかないんだ。悪いな。恨むなら、依頼した社長を恨んでくれ」

「で、ですから！どうか！明日までで良いんです！」

「そいつは無理な相談だ。明日には任務完了の届けを出さなきゃいけないからな。契約さ」

半狂乱になりつつある男。無理もない。理不尽な死であることは、加害者である俺が一番分かる。

速やかに殺さなければ、この騒ぎを聞き付けて住人が集まるだろう。大体3分以内に全てのケリをつけなければならぬのは常識だ。

「運がなかった。それだけだ」

「ひっ！」

夜のアパートに、ガンという檄鉄が鳴った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4064z/>

---

クローバー

2011年12月17日00時46分発行